

# 初期豆男物の系譜と趣向の研究

(要約)

広島大学大学院文学研究科  
博士課程後期人文学専攻  
学生番号：D 1 6 5 9 6 2  
氏 名：福岡 依鈴

豆男物と呼称される、近世中期から末期にかけて人気を博した作品群がある。豆男物に属する作品は、浮世草子や黄表紙、読本だけでなく、絵が中心となる艶本にも存在する。その中でも、本論では、宝暦期から安永期にかけて江嶋其磧『魂胆色遊懷男』

（正徳二年〈一七一二〉頃刊か。以下、『懷男』）にある魂の入れ替わりの趣向と身体の微小性という趣向を両方引き継いだ作品（以下、両方の趣向を用いた作品群を「初期豆男物」と表記）が多く板行されていることに着目した。『懷男』の流行以降、身体の微小性と魂の入れ替わりという二つの趣向をそのまま引き継いだ初期豆男物が多く板行されたことは、豆男物の発展を考える上で看過できないであろう。また、初期豆男物では、序文や本文で『懷男』について言及しており、その影響を受けているのは明らかである。『懷男』の直接的な影響が認められる作品群を横断的に考察する意義は十分にある。

しかし、先行研究では、作品それぞれにある特質を考察することなく、魂の入れ替わりや身体の微小性という特徴的な二つの趣向に着目した論が展開される傾向にある。作品の様相を明らかにしないまま豆男物全体を論じて、十分な説得力があるとはいえないのではなかろうか。

以上のことから、本論は、初期豆男物の本文分析や影響関係が認められる作品同士の比較を通して、初期豆男物の趣向の変遷の一端を明らかにすることを目的とし、先行研究では具体的な分析が行われていない作品に焦点を当てた第一部「『栄花遊二代男』以降の初期豆男物の研究」と、初期豆男物全体を対象とした考察を行う第二部「初期豆男物における趣向の変遷」の二部で構成した。

第一部では、宝暦以降に板行された初期豆男物を対象とし、本文の分析や他作品との比較を通してそれぞれの作品にある特質を明らかにすることを試みた。

第一章「『栄花遊二代男』論—後続する豆男物への影響—」では、作者不詳『栄花遊二代男』（宝暦五年〈一七五五〉成。以下、『二代男』）に焦点を当て、『懷男』やその続篇である江嶋其磧『豆右衛門後日女男色遊』（正徳四年〈一七一四〉頃刊か。以下、『女男色遊』）の登場人物の設定や類似した展開を比較し、『二代男』にある独自の趣向について考察を行った。

『懷男』では逢坂山の仙女、『二代男』では豆休（『懷男』の主人公である大豆右衛門の法体後の名）が主人公に豆男物の主人公が持つ能力を授けるが、仙女には能力を授ける役割しかなく、冒頭部以外では姿を現すことがないのに対し、豆休は主人公の作蔵に色恋に関する忠告を与えたり、傲慢を戒めるために再度登場したりするなど、作蔵を導く役割も有している。『二代男』では、豆男物の主人公が持つ能力を授ける存在の立ち位置を『懷男』から変更していると考えられる。豆休を登場させる形で先行作とのつながりを明確した上で、『懷男』・『女男色遊』の続篇として執筆していることを強調しようとしたのだろう。

また、明和期に成立した初期豆男物では『二代男』について言及している作品が多いことを踏まえ、『二代男』と後続する初期豆男物の本文比較も行った。作品ごとに細か

な差異は見られるが、後続する初期豆男物でも、能力を授ける存在が御告げや罰を用いて主人公を導くという展開は継続して取り入れられている。作品構成という点で、『二代男』は後続作に強い影響を与えていると考えられる。

第二章「『吾妻男仙伝枕』と業平」では、御客散人序『吾妻男仙伝枕』（明和三年〈一七六六〉成。以下、『吾妻男』）について、本文中で業平と関係がある事物について言及している箇所があることに着目し、業平の要素が用いられている章の分析を通して、豆男物と業平の要素がどのように関連付けて描かれているのか考察を試みた。

まず、『吾妻男』巻一の一では、主人公である豆作が能力を授ける存在である豆休に会えるよう業平天神へ祈った結果、業平天神の使いである飛梅の精が現れ、豆休がいる蓬莱宮へと豆作を連れて行く展開が描かれている。先行する初期豆男物では能力を授ける存在が直接主人公の前に姿を現しているが、『吾妻男』では、その前に業平天神が豆休との出会いを手助けする展開が追加されているといえるだろう。間接的に色恋の自由を叶えるという役割を持たせることで、業平天神という存在を強調しているのだと考えられる。

また、最終章である巻五の三「紫の所縁女は杜若の精魂」では、三河国八橋を訪れた豆作が自分より身体の小さい女性と出会い、情交をするために女性の家へと連れていかれる様子が描かれているが、これは、『伊勢物語』を題材とした謡曲『杜若』にある、旅の僧侶が里の女性（実は杜若の精）に誘われ、女性の家泊まるという展開を取り入れて物語を構成していると考えられる。章題に「杜若の精魂」とあることを考えると、『吾妻男』巻五の三の女性は『杜若』に登場する杜若の精をモデルにしているのは明らかだろう。

他にも、『吾妻男』には近世に広く知られていた業平の俗説を踏まえた章や、『伊勢物語』第六九段の斎宮を基にした女性が登場する章などが存在する。先行する初期豆男物と比べても、『吾妻男』は「まめ男」である業平と豆男のつながりを強調した構成となっているといえるだろう。

第三章「『色道修行男』試論一卷三における趣向の利用について一」では、雁金その字序『色道修行男』（明和五年〈一七六八〉序。以下、『修行男』）の巻三について、章同士に話の内容や要素に明確なつながりが見られることに着目し、巻三全体の展開の分析を行った。まず、雷蔵という役者が登場する巻三の一は、本文と明和四年（一七六七）頃の役者評判記の記述を照らし合わせた結果、中村座の人気役者であった市川雷蔵が正月の二の替の芝居を病欠し、後に病死したという事実を基に物語を構成していることが明らかになった。当時話題となっていた出来事に豆男物の趣向を組み合わせることで、読者の関心を惹こうとした可能性が考えられる。また、巻三の二でも、素人役者と魂を入れ替えた主人公と天狗との会話を通して、明和四年頃に興行があった演目について触れている箇所がある。巻三の一と二は、明和四年頃の歌舞伎界の流行を踏まえた展開となっているといえるだろう。

次に、巻三の二に情交の相手として登場する山姥は、好色な一面のある老婆であり、かつて坂田金平（「金時」を誤記したものか）の母親であったという説明が付されてい

るが、これは、元遊女である荻野屋八重桐が山姥となり、坂田金時を育てる様子が描かれる近松門左衛門「軀山姥」や、百魔山姥という遊女が登場する能「山姥」などの先行する演劇から趣向を得ていると考えられる。この二つの作品の認知度が高かった近世期において、山姥と遊女を結びつける風潮があった可能性は十分にある。『修行男』の山姥の設定も、山姥と遊女の結び付きから好色との関連性を見出したのではなかろうか。

また、巻三の三では岡野という老婆が情交の相手として登場するが、本文中では岡野を醜く好色な一面を持つ老婆だと説明していることから、巻三の二の山姥との関連性が認められる。巻三の二の山姥の趣向は、次章で現実の老婆との情交を描くための布石でもあったと考えられる。このように、巻三は、実在した人気役者から素人役者、山姥から醜い老婆というように、趣向を連鎖的に活用しているといえるだろう。

他にも、『修行男』巻四の一では、『懷男』巻四の二の趣向から流用したことが明らかだけでなく、本文中で『懷男』の名を直接挙げていることについても指摘を行った。巻三の一で現実の歌舞伎役者を実名で登場させていることも踏まえると、『修行男』には、趣向の基となった作品や江戸で起きた出来事について、作品名や人名などを本文中に直接掲げるといった特質があるといえるのではなかろうか。

第四章「『潤色栄花娘』と観音信仰」では、初期豆男物の中では初めて女性が主人公となった漁柳序『潤色栄花娘』（明和七年〈一七七〇〉序。以下、『栄花娘』）に焦点を当て、先行する豆男物との比較や本文の分析から作品の特質を明らかにすることを試みた。『女男色遊』巻五の四と『栄花娘』巻五の二は、主人公が奉公先を見つけ、主人夫婦の悩みを解決することで褒美をもらい、一生を栄花に過すという展開をたどるという点が共通しているが、『女男色遊』では妊娠をすることを忌避する要素が見られるのに対し、『栄花娘』ではそのような要素は完全に排除されている。このような相違があるのは、先行する初期豆男物とは異なり、『栄花娘』では主人公のお豆に清水寺の観音の申し子という独自の設定が付されていることが影響している可能性がある。清水寺の観音や清水寺という場が妊娠・出産と関連付けられることが多かったことを踏まえると、清水寺の観音の申し子であるお豆にもこのイメージが適用された可能性は十分に考えられる。妊娠に対する忌避の要素は、このイメージと矛盾する要素であったために排除されたといえるだろう。

清水寺の観音の申し子という設定以外でも、清水寺の観音の使いが豆男物の主人公が有する能力を受け、御告げや罰を通してお豆を導く存在として数度登場することをはじめ、お豆自身が清水寺の観音の使いとして行動し、聾啞者の女性を救う章があるなど、『栄花娘』には清水寺の観音信仰に関わる部分が数多く見られる。『栄花娘』の根底には、清水寺の観音信仰という要素が存在することは明らかだろう。

また、『栄花娘』は、女性の色恋の悩みや色恋による命の危機を、清水寺の観音やその使いである風、あるいは申し子であるお豆が救うという物語を描くことで女人救済という要素を取り入れ、好色であることが許されない女性の色恋を正当化しているともいえる。御伽草子や仮名草子などで女性や色恋と関連付けられていた清水寺の観音をお豆の信仰対象として描くことで、無条件に色恋を楽しむことを許されない女性の色恋を意

味があるものとして正当化しようとしたのではなかろうか。

第五章「主人公の設定から見る『潤色栄花二代娘』」では、まず、『栄花娘』の続篇である寝ぼけ先生序『潤色栄花二代娘』（安永三年〈一七七四〉序。以下、『二代娘』）の主人公について、『栄花娘』の主人公の設定と比較を通して相違点を考察し、作品の特質を明らかにした。『栄花娘』のお豆や『二代娘』のおかべ（『潤色栄花娘』のお豆が隠居した後の名）には観音を深く信仰するという設定があるのに対し、『二代娘』の主人公である二代目お豆にはそのような設定は見られない。『栄花娘』のお豆とは異なり、二代目お豆の出自に清水寺の観音が関係しないことが、『二代娘』の観音信仰要素の消失に影響を与えていると考えられる。

また、先行する初期豆男物の冒頭では主人公の心中描写や能力を授かる経緯を描いているのに対し、『二代娘』巻一の一では、おかべやその夫である豆之進の結婚と出産を中心に物語が展開されており、二代目お豆の心情描写は存在しない。『二代娘』巻一の一は、二代目お豆の出自そのものを説明することに重点を置いているといえるだろう。豆之進が『吾妻男』の豆作の息子であるという設定が同章で説明されていることと、巻一に「男女氏系図」という、豆男や豆女の血統と彼らが主人公として活躍する作品を記した系譜図を掲げていることと合わせて考えると、巻一の一の出生譚は、『二代娘』が『懐男』からはじまる豆男物の正統な後続作であることを強調するために描かれたのではなかろうか。

他にも、『栄花娘』では清水寺の観音信仰を通して教訓性が強調されていたのに対し、『二代娘』でそのような教訓性がほとんど描かれていない点についても指摘を行った。『二代娘』には伊勢神宮信仰の要素が存在するものの、『栄花娘』の清水寺の観音信仰と異なり、物語の根底にある要素であるとはいえない。明和八年（一七七七）に抜け参りが流行していたことから、伊勢神宮信仰の要素は同時代の読者の関心を得るためだけに取り入れられた可能性がある。『二代娘』は『栄花娘』のように豆女を主人公としながらも、内容面では『懐男』・『女男色遊』のような、宝暦より前に成立した豆男物の作風に回帰することを試みたと考えられる。

第二部「初期豆男物における趣向の変遷」では、第一部で行った考察の結果を踏まえつつ、初期豆男物全体に視野を広げ、魂の入れ替わりや身体の微小性をはじめとした趣向の変遷を辿ろうと試みた。

まず、第六章「『けいせい色三味線』から『魂胆色遊懐男』へ一魂の入れ替わりの趣向の変容」では、江嶋其磧『けいせい色三味線』（元禄一四年〈一七〇一〉刊。以下、『色三味線』）に傾城買の心玉の憑依という、『懐男』の魂の入れ替わりと類似した趣向があることを踏まえ、両作品の本文や作品構造の比較を通して魂の入れ替わりの趣向にある独自性を明らかにしようとした。作中の記述を見ると、『色三味線』の傾城買の心玉は、人々に憑依して遊郭で金銭を浪費させる、実体のない一種の怨霊に近い存在として描かれている。しかし、傾城買の心玉は冒頭と結末にしか登場せず、憑依の趣向も冒頭でしか用いられていない。これに対し、『懐男』の大豆右衛門は、色恋を楽しむという目的を持って主体的に行動する人物として描かれている上に、全ての章で姿を現し

ている。傾城買の心玉の憑依の趣向は冒頭以外では物語を主体的に動かすことがないのに対し、魂の入れ替わりの趣向は物語を主体的に動かす重要な趣向として描かれているといえるだろう。

また、『寛濶役者片気』（宝永八年〈一七一〇〉刊か）の改板本巻末にある『懷男』の広告や『懷男』本文の分析を通し、どのような過程を経て趣向が変容していったのかについても考察を行った。『寛濶役者片気』にある『懷男』の広告では、様々な立場の女性との色恋を描いたと宣伝している。傾城買の心玉の趣向から傾城買という要素を排除して魂の入れ替わりの趣向へと発展させることで、『色三味線』とは異なり、遊女に限らない様々な立場の女性を相手にした物語を描こうとした可能性が考えられる。

続く第七章「初期豆男物における魂の入れ替わりの意義」では、第六章の考察結果を踏まえつつ、比較対象を初期豆男物全体へと広げた。初期豆男物では美人局のような策略譚を描いている作品が多いことに着目し、豆男や豆女がどのように関わっているのか分析を行った上で、後続作で魂の入れ替わりの趣向の扱われ方が変化した可能性があることを明らかにした。美人局が中心となる章は『女男色遊』、『二代男』、漁柳か『潤色栄花娘道中之巻』（明和七年〈一七七〇〉以降成か）に見られるが、『女男色遊』では大豆右衛門が美人局を主体的に阻止しようとしなのに対し、後続する二作品では、主人公たちが換魂能力を用いることで意図的に美人局を失敗させている。『女男色遊』と宝暦以降に成立した初期豆男物では、主人公の態度に相違があることが分かる。

また、美人局に限らず、宝暦以降の初期豆男物では、豆男や豆女が他人の策略を阻止するため、あるいは自身の目的を達するために魂の入れ替わりを用いた策を講じる展開が見られるようになる。このような展開がほとんど見られない『懷男』や『女男色遊』と比べると、宝暦以降の初期豆男物は更に主人公自身に重点が置かれた構成になっているといえるだろう。

第八章「身体の微小性に関する諸考察」では、小さ子譚の系譜に連なる御伽草子と『懷男』の主人公設定の比較を行いつつ、初期豆男物における身体の微小性の趣向の変遷について考察を試みた。小さ子譚の系譜に連なる御伽草子（『小男の草子』・『一寸法師』）と『懷男』では、主人公の身体の変化の過程は相反しているものの、元の姿のままでは色恋を楽しめないために姿を変じたという要素が共通している。『懷男』の大豆右衛門の設定は、小さ子譚の主人公の設定を参考にし、あえて変身の順序を反転させた可能性があるだろう。

また、章の後半では、閉じ込められる趣向が取り入れられた章のある初期豆男物を対象に本文比較を行った。『女男色遊』では閉じ込められている間大豆右衛門の心情に重点が置かれていないのに対し、後続する初期豆男物では、主人公たちが閉じ込められた後、脱出を試みたり、苦しんだりする様子が具体的に記される傾向がある。宝暦以降の初期豆男物では、閉じ込められた主人公の行動や心情に重点が置かれた描写がなされているといえるだろう。色恋を描くこと以上に、主人公の失敗や成長を描くことに物語の重点が移っていった可能性も考えられる。

終章では各章の内容を一瞥した上で、初期豆男物の特質をまとめた。『懷男』・『女

『男色遊』では大豆右衛門に色恋の欲求を持つという設定だけを付し、作中でも魂を入れ替えた情交とその後の混乱を描くことに終始していたのに対し、宝暦以降に成立した初期豆男物では、徐々に主人公の行動や心情を表わす記述が増加し、豆男や豆女自体に重点が置かれた構成となっていくと考えられる。『吾妻男』の業平とのつながりや『栄花娘』の清水寺の観音の申し子など、主人公の設定が追加されていったのも、豆男や豆女を中心に物語を展開させるために必要な要素であったためではなかろうか。